電気醤説
『mushroom』

りぃだぁ（from電気醤油）

スパゲッティ

　「師匠！師匠！夕飯の支度ができました。起きてください。」
家具職人の有栖山源助はその声で目を覚ましました。
源助は王様の住むお城のすぐ横で家具屋を営んでいます。旧華族の家柄ながら、家を飛び出して修行した異色の職人です。全国にたくさんの弟子を持つ凄腕で、その世界では有名なのですが派手なことが嫌いなので一般的にはあまり知られていません。 今回は、弟子のひとりが北海道の山奥にある実家で工房を開くというので改装の手伝いに来ていました。源助の指導は人一倍厳しいのですが、弟子の面倒見はとてもよかったのです。
3日間の予定で手伝いに来ていましたが、雨の日が続いて思うように作業ができず、滞在期間を１週間に延ばしたところでした。 電話を受けた妻のハツさんも源助の性格はわかっているので、「お店は心配しなくていいから」と快く承諾してくれました。
　「ん？あぁぁぁ～！もうそんな時間か。10分くらい休憩のつもりだったのに、グッスリ寝ちまった。すまねぇな、あまり役に立てなくて。」
源助はゆっくり起き上がると、傍らに置いてあったキセルを取り上げ、煙草の葉を詰め込んで火を点けました。
　「そんなことないですよ。師匠のお陰で作業が10倍くらい早く進んでます。大助かりですよ。」
実際、工房の内装はほぼ整い、源助はオープニングを飾るために新しいタンスまで作ろうとしていました。
　「そう言ってもらえると来た甲斐があったってもんだ。さて、夕飯は何を馳走してくれんだい。」
　「実は米を買い忘れていまして。キッチンを探したところパスタがたくさんありましたので、今日はそれにしました。」
　「そうか、忙しかったからな。米が食えねえと力が出ないが、お陰でお前さんのスパゲッティも久しぶりに食べられるってもんだ。」
お弟子さんは、元イタリア料理店でコックをしていたのでパスタが得意でした。和食党の源助も、時々賄いで作る彼のパスタだけはおいしいと食べていました。 改装の間、家族は隣町のアパートに仮住まいしているので、夕飯は２人きりです。
　「ではいただこうかね。おや？これは何だ？」
パスタに、まるっこいものがたくさん入っています。
　「近所の方がマッシュルームをくださったんですよ。」
途端に源助の眉間に皺が寄りました。
　「おめ～、俺がキノコ嫌いなの忘れたのか？」
声もドスが効いています。弟子はさぞかし震え上がっているだろうと思いましたが、顔色ひとつ変えません。
　「忘れちゃいませんが、たくさんいただいてしまったもので。それに師匠、好き嫌いはよくないですよ。おかみさんからも、何でも食べさせるように言われてます。」
淡々と言うと、源助が投げ出したフォークをまた持たせて、自分は先に食べ始めてしまいました。
　「ババアめ、余計なことを…」
小声でブツブツ言いながら、源助もフォークを突き刺し食べ始めました。 きれいにマッシュルームだけ残していましたが、弟子の鋭い視線を感じて、仕方なく食べてみようとして、やはりフォークが止まります。
　「う～ん」
マッシュルームを見つめながらコロコロ転がしています。
（なんだってこんなものをみんな旨そうに食べるんだい。キノコってのは菌の塊だぞ。そんな気持ち悪いもの食えるか…。 ）
弟子はさっさと食べ終わって片づけに入ってますが、まだ源助は皿を見つめたままです。
　「師匠！」
弟子の声に驚いた源助は、皿をひっくり返しマッシュルームをすべて床に落としてしまいました。
　「あっ、しまった！これはもったいない。」
嫌いなものであっても、食べ物には違いない。粗末にはできないと、拾おうとしましたが見つからない。見回すと、コロコロと外に転げていくところでした。 源助もあわてて外に出ましたが、見失ってしまいました。

「どこ行きやがった。」
雲が途切れて月が顔を出しました。源助が北海道に来てから初めての晴れ間です。月の光を反射したマッシュルーム達が一列に転がりながら森の中へ消えていくのが見えました。
転げていったマッシュルームを追って、源助も森へ入って行きました。さらに追いかけていると、大きな穴にマッシュルームが次々と落ちていきます。それを見た源助も思わず穴に飛び込んでしまいました。
不用意に飛び込んだ源助は地球の裏側まで落ちていってしまうのかと目をつむりましたが、すぐに尻餅をついてしまいました。 そこは深さ1メートル程の穴で、そこから横穴がのびてまた外につながっていました。マッシュルームはさらに転がっていきます。
「なんだってそんなに転がっていくんだい。そうか、俺に食べられるのがいやなんだな。いや…しかし、俺は食べたくないわけだから利害は一致してるし、逃げるこたーない。じゃあ、育った森に帰りたいのか？」
源助はブツクサ言いながらもマッシュルームとの距離を少しずつ縮めていきました。 マッシュルームはなお、森の中をあっちにコロコロ、こっちにコロコロ。それを源助は追いかけます。
「お、しめた！」
そろそろ脚がフラついてきた頃、切り立った崖にぶつかって、ようやくマッシュルームが止まりました。
「はあ、よかった」と立ち止まった瞬間、今度は少し大きめの白い物体が見えました。 一羽のウサギがマッシュルームに近づいていくと、ササササッと素早く拾い上げ、走り去ってしまいました。 せっかく追い付いたマッシュルームをあっという間に横取りされて、源助は唖然としてしまいました。
「仕方ない、帰ってヤツに謝るか。しかし、どうやって帰ったもんかなぁ。」
マッシュルームに振り回されて、どこをどう来たのか覚えていません。 とにかく、走ってきて崖にぶち当たったのだから、逆方向に歩くことにしました。 しばらくすると、また崖がありました。
「おや、おかしいな？」
仕方ないので崖に沿って右側に歩いていきます。そうしているうちに、夜が明けてきて、周りの景色がよく見えるようになってきました。
「これはどうしたというんだ？」
気付くと周りを崖に囲まれていました。 源助は困ってしまいました。
「しかし、ここまで来れたってことは、帰れないはずはないだろう。」
さっきまであったはずの森の木々もまったく無くなっていて、ただの草原のようになっています。 源助が帰り道を探すためにグルグル見回していると、草原の真ん中に何か見えました。近づいてみると、ちゃぶ台です。
「なんだってこんなところにちゃぶ台が？まったくヘンテコなことばかりだな。」
他に何かないのかと顔を上げると、正面の崖にドアが見えました。
「お、あんなところにドアがあるなんて、いかにも怪しい。でもしょうがない、行ってみるか。」
源助が近づいていくと、ドアはどんどん小さくなっていきます。目の前に着いたときには、いつも家に常備されている草加煎餅ぐらいの大きさになっていました。 何が何だかわからない源助は、ちょっと後ろに下がってみました。するとその分だけドアが大きくなります。近づくと小さくなります。それを何度か繰り返しているうちに、なんだか頭がクラクラしてきたので、とりあえずちゃぶ台まで戻って休むことにしました。 ちゃぶ台の前に座って、またドアを見ると、やはり人が入れそうなくらいの大きさをしています。 源助は頭をブルブル振るって、そのまま後ろに倒れ込みました。
空は青く、白い雲が風に乗ってゆっくりと動いていくのが見えました。 源助は弟子が気になり出しました。きっと心配してるに違いない。でも、 「だったら探しにくるとか警察に連絡するとかしてんだろうな。まったく…」 ブツクサと呟いていると、コトンと音がしました。

お茶と煎餅

崖の下の小さな小さなドアを、源助はじっと見つめていました。 手には、これまた小さな小さな鍵が握られています。
ちゃぶ台の下で寝転んでいたとき、小さな音に起き上がってみると、お茶が入った湯呑みと煎餅が置かれていました。
湯呑みの下には一枚のメモが敷かれています。

『一服いかが？』

　「こりゃ丁度いい、一杯いただくか。…って、なんだって茶が入ってんだ！！」
と軽く乗り突っ込みしながらも、お茶を一口啜りました。
　「なんだこのお茶、旨いじゃないか。ばあさんに土産に持って帰りたいがどこかで売ってるのかな？にしてもだ、こんな森の中で、いや崖の間で、いやいや草原の真ん中で茶を飲んでるなんざ夢でも見てるみたいだ。」
煎餅をバリバリと頬張り、また湯呑みを手に取りました。
　「おや、茶柱じゃねぇか。珍しい。いいことがありそうだなぁ。」
少し顔をほころばせて湯呑みに顔を近づけました。
　「ん？これは茶柱じゃないぞ。」
浮かんでいるものをつまみ上げると、小さな小さな鍵でした。

　「これで開くのかなぁ？」
源助は小さな小さなドアの前で考え込んでいます。
　「開いたとして、この小ささじゃ入れないし…。でも他に何もないんだ、とりあえず開けてみるか。」
源助は小さな小さな鍵を、小さな小さなドアの、さらに小さな小さな鍵穴に差し込んで回してみました。
ガチャッ
鍵の開く音がしました。 差していた鍵を抜くと、ドアがゆっくりと開いてきました。 固唾を飲んで見ていた源助は目を見張りました。 開いたドアの中から、マッシュルームがひとつ、コロンと転がり出て来たのです。
　「うおっ、ビックリした～。なんでキノコなんか出てきたんだ？」
源助は、他に何かないかと地面に這いつくばりながらドアの中を覗いて見ますと、ネズミ穴のような通路の先にきれいなお花畑が見えました。
　「やっぱりこのドアが外に繋がってるのか。しっかし、こんなに小さくっちゃあ通れやしない。」
仕方がないので、そのマッシュルームを拾って、ちゃぶ台まで戻ることにしました。
ちゃぶ台まで戻ると、いやちゃぶ台があったはずのところに戻ると、真っ赤なソファに変わっていました。 源助は頭の中が？？？でいっぱい真っ白なってしまいました。 ソファには大きな野ネズミがゆったりと寝ころび、サイドテーブルに置いてある紅茶を飲んで寛いでいます。
　「何なんだお前！」
源助は思わず怒鳴ってしまいました。 驚いて飛び上がると思われた野ネズミですが、ゆっくりと起き上がると源助を一瞥しただけで、今度は枕にしていた本を開いて読み始めました。 あまりの無視のされように困ってしまった源助は、といあえずサイドテーブルの横に腰かけるとマッシュルームと鍵をその上に置きました。
　「あ～あ、どうしたもんかなぁ。」
例のドアを遠目に眺めながら深いため息をつきました。しばらくそのままぼーっとしていると、不意に変な気配を感じました。 チラリと野ネズミの方に目をやると、野ネズミはマッシュルームをすごい目でガン見していました。口元からはヨダレが垂れそうです。 あまりのその様子にドン引きの源助でしたが、気を取り直すと野ネズミに話しかけました。
　「このキノコが欲しいのかい？」
野ネズミは、源助が最後まで言い終わらないうちから、首が折れそうなほどコクコクうなづいています。
　「こんなのがそれほど欲しいのかぁ。」

マッシュルームを手に取ると、改めてジッと眺めてみましたが、やはりちっともおいしそうではありません。
「ところで、お前さん名前は何て言うんだい？」
野ネズミはこぼれそうなヨダレを腕で拭うと、 「ボク？」 と聞き返しました。 意外とかわいい声をしています。
「そうだよ、他に誰がいるんだい。名前をきいてんだよ。」
「ボク？」
また野ネズミは聞いてきました。
「何度言わせんだい。そうだよあんたの名前をきいてんだよ。」
源助はイライラしてきました。 ところが、それは野ネズミも一緒でイライラしているようです。
「だからボクだってば～。」
源助は何が何だかわかりません。
「だ～か～ら～、名前はボクだって言ってるのにぃ。」
「ボクってのが名前なのかい？」
源助は目を円くして言いました。
「ボクサンスキー・アルティメイタム・パイポノ太郎だよ。フルネームは長いから、通称ボクなんだよ。めんどくさいな～、こんな説明初めてしたよ。」
「変わった名前だなぁ。」
「そういうおじいさんはなんていうの？」
野ネズミのボクは逆に訊いてきました。
「おらぁ源助だ。有栖山源助。」
「有栖…アリス？そういえば昔、そんな名前の女の子が来て、猫だの犬だのおいらが嫌いな言葉を並べ立てたことがあったなぁ。」
野ネズミは遠くを眺めながら昔のことを思い出していました。
「あの子は英語でしゃべるものだから、言ってることがよくわからなくて。でもフランス語が少ししゃべれたから助かったけど。」
源助は、始め何のことかわかりませんでしたが、思い当たることがあったので恐る恐訊いてみました。
「それはまさか…ルイス・キャロルの『不思議の国のアリス』のことかい？」
「キャロルってのは知らないけど、そういえばそんな本になってたな～。俺の描写が気に入らなかったけど。」
野ネズミはちょっと不服そうです。源助はそんな野ネズミの様子など気にしていられません。
「あの不思議の国は北海道のことだったのかぁ～。」
こんな大発見をするとは夢にも思いませんでしたから。
「確かに地球の裏側まで突き抜けるくらい穴を落ちたってあった気がする。」
「何をブツブツ言ってるの？変なおじいさんだなぁ。そんなことより…」
野ネズミは、源助が持っているマッシュルームを見て、またヨダレが溢れてきたようです。
「ああ、これか。あげてもいいが、その前に君はどこから来たのか教えてくれないか？」
「キミじゃなくてボクだよ。」
「あ、いや、そういう意味じゃないんだけどな…。まあいい、ボクはどこから来たんだい？」
「あそこだよ」
野ネズミが指差す方を見ると、さっきまではなかった井戸のようなものがあります。
「井戸？」
「そうだよ。」
「なんで井戸から？」
「何でって、ここに来るにはあの井戸を使うしかないじゃないのさ。アリスは変なことばかり言うなぁ。」
「じゃあ、ここから出るのもあの井戸を使うしかないってわけか。よしわかった。ありがとよ、ボク。このキノコはお前さんにあげるよ。」
源助はもうへんてこなことに慣れっこになってしまったので、とりあえずあの井戸でここから出られるのだろうと思いました。野ネズミに礼を言い、マッシュルームをヒョイと投げると、野ネズミはパクっと飛びつきました。そのまま地面

に降り立ちましたが、またソファに戻ると、満足そうにモグモグしています。 それを見届けると、源助は井戸の方へと向き直って歩き出そうとしました。

にっ…クシュン！！
野ネズミが突然、大きな大きなくしゃみをしました。 それはもう地面が揺れるほどの大きなくしゃみです。
　「うわっ、ななな何だ！」
源助も驚いて尻餅をつきました。
クッシュン！クッシュン！にっ…クシュン！
くしゃみは止まりません。そのたびに地震のように揺れます。
　「おい、何とかなんないのか？」
源助は大声で言いましたが、野ネズミも止められないらしく、くしゃみを繰り返しながら手を振っています。
　「こりゃ、北海道全体が揺れてるようだ。」
そんなことはあり得ないのですが、源助にはそのくらいに感じられました。 そのうち、あまりの揺れに井戸から水が溢れてきました。そうは言っても、大した量ではありません。 と思っていたら、ひときわ大きなくしゃみが後ろから聞こえました。
ハッッッッックショィンンンン！
すると井戸から、間欠泉のように水が飛び出して来たのです。
　「うわ～、これはヤバイ！」
そう言ってる間に水はどんどん溢れてきて、もう首の辺りまで来ています。 源助は泳ぎが得意なので、何とかなりましたが、そこら中からたくさんの動物や鳥が流されてきました。野ネズミが気になって探しましたが、水に浮いたソファの上でくしゃみ疲れで寝ていました。 そのまましばらく流されていくと、陸地が見えてきました。みんな助け合いながら水から上がっていきます。
　「いやぁひどい目にあったなぁ。」
熊がブルブル体を震わせながら言いました。
　「こんなの天気予報で言ってなかったぞ。」
　「山の天気は変わりやすいんだ、しかたねぇ。」
みんな少し落ち着いてきました。
　「おい、大丈夫か？」
突然大きな声がしました。 最後に引き上げられたキツネが、イタチに抱えられてこちらへやってきます。グッタリして、息も絶え絶えの様子です。
　「大丈夫か？ポンタ。いま医者を呼びに行かせたからな。」
フクロウがキツネに寄り添って声を掛けています。
　「ポンタってのはあのキツネのことかい？」
源助はキツネを連れてきたイタチに尋ねました。
　「そうだよ。キツネのポンタなんてベタな名前だろ。」
　「いやぁ、ポンタだったら狸っぽいなと思ってね。」
　「へぇ、狸にポンタか～。それは思いつかなかった。あんたなかなかネーミングのセンスいいな。」
　「はぁ、そりゃどうも…。」
どうも勝手が違って話にくい。それよりいま気づいたら、動物と普通に会話してるじゃないか。ああ、それはもうどうでもいい。 そんなことを考えてる間に、インコがオランウータンを連れて戻ってきました。
　「先生、ポンタのやつ、また倒れてしまいまして。よろしくお願いします。」
先ほどのフクロウがオランウータンに場所を譲りながら言いました。 どうやら医者のようです。 オランウータン医師は、キツネの左手をパクリと口にくわえ込みました。しばらくして吐き出すと、「ちょっと血圧が下がってるが、少し休めば大丈夫だろう」と言って、まだ往診途中だからと去っていきました。 それでみんな何となく安心したのか、三々五々帰っていきました。 残ったのは、フクロウ、キツネのポンタ、イタチそして源助だけでした。

稲荷寿司

　「それは聞き捨てならないねぇ。なんでフクロウのジイサンが『バニー』の小百合さんとショッピングに行ってんだよ。」
　「フォッフォッ、娘さんの誕生日祝い探しを手伝ったまでじゃ。」
フクロウは余裕な口振りではありましたが、だらしなく鼻の下を伸ばしていました。
　「夜はそのまま『バニー』に行って一杯飲んでな。」
イタチの眉がピクッと動きました。
　「それってただの同伴出勤じゃ…」
　「なんてことを言う！『外で待ち合わせて一緒にお店まで行きませんか？』ってデートに誘われたんだぞ！」
　「そういうの同伴出勤て言うんだよ。」
フクロウとイタチはレシートを確認すると言って、フクロウの自宅へと急いで行ってしまい、源助はポンタと取り残されてしまいました。
　「参ったな～。病人じゃないや病キツネを置いていくわけにもいかないしな…。」
仕方なくゴロンと横になると、疲れがドッと出たのかうつらうつらしてきました。すると何かがコツンと頭に当たりました。慌てて起き上がって周囲を見ると、一粒のマッシュルームが転がっています。 源助はしばらく固まってしまいました。
　「また…キノコ…か…よ。」
拾い上げて顔の前まで持ってきましたが、ため息しか出ません。 物音がしたので振り返ると、ポンタが寝返りをうとうとしています。
　「おい、大丈夫かい。」
声を掛けた源助は、ポンタが弱々しい目でマッシュルームを見つめているのに気づきました。
　「腹が減ったのか？これしかないけど、食いたいのか？」
ポンタは微かにうなづきました。
　「よし、食わせてやる。口を開けな。」
小さく開けたポンタの口にマッシュルームを入れると、何度か咀嚼してゴクリと飲み込みました。 するとどうでしょう。ポンタは目をはっきりと見開き、ヒョイッと飛び起きたのです。 小さいと思っていたポンタは、しっかりと後ろ足で立つと源助を見下ろす形になりました。そして、驚く源助に向かって厳しい口調で言いました。
　「何をしておるルートビッヒ。舞踏会に遅れてしまうではないか。すぐに屋敷から衣装を持って参れ。」
源助は目を円くしてしまいました。
　「ル、ルート…何だって？」
　「聞こえなかったのかルートビッヒ。私は気が短いのだよ。」
ポンタの目が赤く光り、耳は長く伸びてきました。気持ち悪くなった源助は、とりあえずポンタが指差す方向に行ってみることにしました。
　「あいつ、使用人か何かと間違えたな。まったく。それにしても、怒って鬼みたいになるのかと思ったら、何だってあんなウサギみたいな顔なんだ？笑いそうになるじゃないか。」
しばらく歩くと住宅街に出ました。変な森から抜け出せたのかと一瞬喜びましたが、よく見ると様子がおかしいです。目の前の家には玄関がありません。変だなぁと思い玄関を探していると、カラスが集団で飛んできました。みな二階の窓から中に入っていきます。 いや、窓ではありません。よく見るとちゃんと門があって玄関のようになっています。ドアが閉まると、『カラス集合住宅』の表札が見えました。
　「カラスの家だったのか。」
隣の家には『タマ』という表札です。大きさは普通の家ですが、明らかにドアの付いた犬小屋でした。 源助がその家の前でキョロキョロしていると、ドアが開いて犬の母子が出てきました。
　「あんた、うちの前で何やってんのさ。」
　「ありゃ、ホントに犬の家だったのか。」
2人はきれいに着飾っています。お出掛けのようです。

「あたしは犬だからって犬っぽい家は嫌いなのよ。とってもモダンでしょ？」
メガネに手をやり、犬のタマの奥さん(たぶん？)は得意気に言いました。
「ん？あぁ、そうだな…。それにしてもこの辺は変わった家が多いな。」
「ここはお洒落な動物たちが住む住宅地なの。隣のカラス住宅も、同潤会アパートを模してるのよ。みんな真っ黒に見えるけど、一羽一羽の羽根の色は微妙に違うのよ。」
「へ～、そりゃ驚いた。」
「向かいの家はね…」 と言われて前を見たが、空地です。
「空地のように見えるけど、モグラさんの家なの。空地に見えてるところは屋根だから、あんまり走り回ったりしてると怒られるわよ。それじゃね。球子行くわよ。舞踏会に遅れちゃう。」
犬の親子は、尻尾をフリフリしながら急ぎ足で去っていきました。
「あのこ達も舞踏会かぁ。いけね、キツネの家を訊けばよかった。」
しかし数軒先にすぐ、『ポンタ』という表札を見つけました。 とっても和風な一軒屋ですが、なぜか屋根や庭に雪が積もっています。 しかしよく見ると作り物です。それはそうです北海道とはいえ、今は夏ですからね。きっとキタキツネのつもりなのでしょう。
「お邪魔するよ。うおっ！」
ガラガラッと玄関を開けると、タキシードを来た老キツネが胸に手を当てて会釈しています。
「お帰りなさいませ。」
源助は驚いて固まっていましたが、ふと思い出して声を掛けてみました。
「ルートビッヒか？」
「はい、ポンタ様。メガネをお忘れですか？ど近眼なのですから気を付けていただかないと。」
（使用人のわりにはズケズケものを言う奴だな～。そうか、ポンタはど近眼で、俺のことがよく見えなかったのか。それでルートビッヒと間違えたんだな。それにしても…）
「申し訳ありません。実はそういう私も本日はメガネを忘れてしまいまして、よく見えておりません。ご容赦ください。」
（そうか、それなら丁度いい。面倒だからこのまま成りすましてしまえ。）
「あ～、ルートビッヒ、舞踏会に行く衣装を出してくれ。」
「かしこまりました。」
ルートビッヒは一礼すると、奥の部屋へと行きかけて立ち止まりました。
「しかし…ポンタ様、いつもと話し方が違いますがどうかなされましたか？」
「えっ！」
源助はドキッとしてしまいました。さっきのポンタの声を真似してみたつもりでしたが、違ったようです。
「そ、そ、そ、そうか？さっき溺れかかったから声がおかしいかもしれないなぁ。」
「いえ、声はそっくりなのですが…」
（そっくりなんかい！）
「いつもは、『お願いね』『よろしくね』という感じですのに。」
（さっきと全然違うじゃないか！どうしよう！）
あせっていると突然、ルートビッヒが涙を流し始めました。
「失礼しました、つい嬉しくなってしまいまして。やっとポンタ様も大人になられましたなぁ。これまでは人の顔色ばかり見てオロオロしていましたのに。」
ルートビッヒはハンカチを取り出し、チーンと鼻をかむと「すぐに衣装をご用意致しますので、茶の間でお待ちください。」と言って奥の部屋へと消えていきました。
「お、おう。」
源助は拍子抜けしてしまいましたが、ルートビッヒに促されるまま靴を脱いで上がりました。 茶の間の座卓には、山盛りの稲荷寿司が用意されていました。
「キツネの家に稲荷寿司とは出来すぎだが、なかなか旨そうだな。」
そういえば、今朝煎餅を一枚食べただけでそれから何も食べてないことを思い出し、お腹がグゥ～ッと鳴りました。

「少しいただくか。」
ひとつつまんでみると、なんともおいしい稲荷寿司です。もうひとつ、もうひとつだけと手を伸ばしていると、瞬く間にすべてたいらげてしまいました。

お茶と団子

　「ななななななっ！」
もうとんでもなくビックリしてしまって、源助の口からは「な」しか出ません。 お腹がガマガエルのようにぷく～っと膨らんでしまったのです。座っていることが出来ずに後ろにひっくり返ってしまい、天井を仰ぎ見ていたのですが、それでもお腹の膨らみはおさまらず、すでに後ろの壁しか見えません。 お腹はどんどん膨らみ、天井まで届きそうな勢いです。ただ不思議なことに、まったく苦しくはありません。
　「う～ん、困ったな～。」
部屋一杯に膨らんだ辺りでお腹はなんとか止まったものの、身動きがまったく取れません。 ちょっと体を揺すってみましたが、お腹が天井と壁にぶつかっているので家全体が揺れてしまいます。 バタバタと廊下を走ってくる音が聞こえてきました。ルートビッヒのようです。
　「ポンタ様！地震です！大丈夫ですか！」
襖を開けようとしますが、源助の腹に引っ掛かって開きません。
　「なんだ、どういうことだ？ポンタ様！ポンタ様！」
ルートビッヒは心配して襖をドンドン叩きながら叫んでいます。源助といえば、それが腹に響いてくすぐったいのなんの、耐えきれずに笑い出してしまいました。するとまた家全体が揺れ、廊下からはルートビッヒが転げて悲鳴を上げているのが聞こえます。 揺れが収まると、次はルートビッヒの驚く声がしました。
　「何だこの部屋一杯の物体は！」
激しい揺れのため、襖が外れてしまったようです。
　「ポンタ様！まさかこの風船みたいな怪物に襲われてしまったのでは！まったくトロいんだから！」
どこかへ走っていく音がしましたが、すぐに戻ってきました。
　「いまお助け致しますぞ！」
ルートビッヒは持ってきたマサカリを、部屋一杯に膨らんだ源助の腹めがけて振り下ろしました。 腹に穴が空くと、中からすごい風が出てきて、ルートビッヒは吹っ飛ばされてしまいました。 気がつくと、窓が割れていて、源助の姿は消えていました。
　「ポンタ様？ポンタ様いずこへ～！」

#######################

　「あたたたたっ！」
空気の漏れた風船のように飛ばされた源助は、また森の中にいました。落ちたのは柔らかな草むらでしたが、窓に勢いよくぶつかったので大きなたんこぶができています。お腹は元に戻っていました。マサカリに切られた辺りをさすってみると、服は少し切れていましたが、不思議なことに特に傷はありません。
　「はあ～、ひどいめにあった。…にしても、ここはどこなんだ？」
その辺を少し歩いていると、何だか景色がおかしいです。シロツメグサがたくさん咲いているのですが、花はすべて頭の上にあります。お腹から空気が漏れた反動で、今度は小さくなってしまったようです。
　「おや？何の音だ？」
一本のキノコの上で、キリギリスの女の子(？)がキーボードを弾いています。とてもいい音色で、源助は聞き惚れてしまいました。全身真っ黒の洋服に身を包み、軽やかに指を動かしています。曲はジャズ調です。 その曲が終わると、大絶賛の拍手をして近づいていきました。
　「お嬢さん、なかなかいい腕だな。ところでそれは何て曲なんだい？」
　「これは私のオリジナル曲。『ブルーインザワールドもしくは青い男への讃歌』。」
キリギリスは独り言のように言いました。

「『ブルーインザワールド』だけじゃダメなのか？変わった名前だな。」
そう源助が言うのを聞いて、初めてキリギリスは源助の方を見ました。
「これは私がある男へ贈った曲なのよ。」
「もしかして、『青い男』ってやつかい？」
「あら、あなたもご存じなの？」
「曲のタイトルになってるじゃないか。」
キリギリスは源助のその言葉を無視して話始めました。
「私はこのキーボードひとつで、世界中を旅して腕を磨いてきたのよ。あるとき、ここから遠く離れたオタルというところにたどり着いた。」
「小樽？世界中って言ってたけど、やっぱり北海道じゃないか。」
キリギリスはその言葉もスルーしました。
「そのオタルでね、いつも『世界が全部青かったらいいのに』と呟いている男と出会ったの。」
「ふ～ん、それで？」
「それだけよ。」
「え？その男と何かあってさっきの曲を作ったんじゃないのか？」
「何かなきゃ曲を作っちゃいけないの？」
キリギリスは不満そうです。
「そういうわけじゃあないが、わざわざその男のために作ったっていうなら理由のひとつでもあるだろう。納得できないな。」
「どうしてあなたを納得させる必要がある？私が作った曲なのに！不愉快だわ！」
キリギリスはそう言い残すと、プリプリしながら去っていきました。
「あら～怒らせてしまった。でも確かにその通りだ。自分の曲だもんな、俺を納得させる必要はないんだ。」
源助も少し反省しました。ただキリギリスも、「無駄話してたら舞踏会に遅れてしまいそうだわ。」と呟いていたのが気になりました。今夜はみんな舞踏会に行くようです。 源助も少し興味が出てきました。こんなにみんなが集まる舞踏会とはどんなものなのか行ってみたくなったのです。 場所がわからないので、とりあえずキリギリスが歩いて行った方向に行ってみることにしました。
随分歩いたつもりでしたが、行けども行けどもシロツメグサの花畑が終わりません。
「このちっこい体じゃあ1メートルも歩いてないかもしれないなぁ。」
さすがの源助も疲れてきました。すると、ちょうどよいことに茶店の看板が見えます。
「『団子屋　妖ちゃん』？」
「いらっしゃい、お茶と団子でいいかい？」
前掛けをした威勢のいい女の子が出てきました。
「ああ、それをもらうよ。ところでお嬢さん、お城の裏手にも似た名前のお店があるんだが系列店かい？あっちは食品店だけどな。」
「ここは死んだうちの父ちゃんが始めたお店でね。店名は昔世話になった人の名前からいただいたって言ってたな。もしかしたらその店のことかもね。あたしには関係ないけど。」
さばさばした娘だなぁと思いつつ、団子を一口食べました。
「うまい！こんな旨い団子は初めてだ！」
源助はあまりの旨さに驚きました。女の子は嬉しそうにしています。
「だろ～？うちの団子は有機栽培の黄金餅を使ってて ね、あんこも…」
団子の説明を始めるとまったく口が止まりません。
「しゃべり方もよく似てるなぁ…。あれ？」
何だか体がムズムズしてきました。体が徐々に大きくなっていくのがわかりました。
「お客さん、何勝手に大きくなってんのよ！」
「やあ、そう言われてもなぁ。君だって毎日少しずつ成長してるだろう？はははっ・・・。」
源助も動揺してしまって、どう対処していいかわからず変なことを口にしてしまいました。

「あたしの成長はそんなに急じゃないよ。ちょっとお店壊さないでよね！お金はいいからとりあえず外に出て〜っ！」
外に追い出された途端、グーンと大きくなって、いまでは茶店の屋根が遥か下に見えなくなってしまいました。 巨大化が落ち着くと、源助はキョロキョロと周囲を見回して木や草と体の大きさを比べました。
「大きくなったと思ったら、これは元の大きさに戻ったみたいだな。」
茶店の娘に一言詫びを入れると(もちろん団子のお礼もね)、店を踏まないように注意して先に進みました。

カレーライス

しばらく歩くと、少し開けたところに出ました。一軒の家があります。
　「舞踏会の場所を訊いてみるか。」
誰かいないかと眺めていたら、一匹の蛙が歩いてきました。 ドアをバンバンと叩くと、中から若い男が出てきました。 腕には大声で泣いている赤ん坊を抱いています。
　「今日の舞踏会行くだろ？」 と蛙。
　「行かないとまずいだろう。伯爵夫人を怒らせると大変なことだ。ただなぁ、いま子どもが泣き出しちまって、こっちも大変なんだよ。」
　「奥さんはどうしたんだい？」
　「ああ、カレーを作ってるよ。」
　「それじゃ仕方ないな。遅れるようなら連絡しろよ。うまく言っといてあげるから。」
蛙は帰って行きました。 男は赤ん坊を抱いたまま、軒下にあるベンチに腰掛けタバコを取り出しました。 それを見ていた源助は、慌てて男に声をかけました。
　「あの、もし、ご主人。他人が余計なことかもしれないが、子どもが一緒の時にタバコなんてよくないですぜ。」
　「ん？ああ、そうだな。あんたいいこと言うね。」
意外なほどあっさりタバコを口からはずすと、ポイッと横へ放りました。
　「吸うなと言ってるわけじゃないんだ。その辺に捨てるもんじゃないよ。」
源助はまたたしなめました。
　「そうだね、その通りだ。あんたいいこと言うね。」
男はタバコを拾うと、ポケットに入れました。 源助は少し呆れながら、改めて男に話しかけました。
　「舞踏会ってのはどこであるんだい？行ってみたいんだが。」
　「伯爵夫人の家だよ。あれ？違ったかな。チケットもう一度見ないと。」
赤ん坊はあい変わらず泣きどうしです。
　「伯爵ってのはどなたのことだね？俺も何人か知り合いがいるんだが舞踏会の報せは来てなくてね。」
　「伯爵なんか知らないよ。僕が言ってるのは伯爵夫人のことなんだから。」
　「だから、伯爵夫人ってことは旦那が伯爵だからだろうに。」
　「確かにそうかぁ。あんた頭いいな。」
源助はこの男との会話に疲れてきたので、家の中にいる奥さんに訊いてみようと思いました。
　「奥様と話したいんだが、上がってもいいかい？」
　「いまはカレー作ってるから止めた方がいいよ。」
　「そんなに凝ったカレーなのかい？」
　「いや、レトルトを温めてるだけだよ。」
やはりこの男と話していると疲れるので、「お邪魔するよ」と一声掛けて家に上がりました。

##########################

キッチンの場所はすぐにわかりました。
ドタンバタンとすごい音が聞こえて来たかと思うと、玉ねぎが飛んでくるのです。 見ると廊下は切りかけの野菜で一杯でした。
　「何だこれは。」
次々と飛んでくる野菜を避けながら、キッチンをそっと覗き込むと奥さんが号泣しながら玉ねぎを切っています。悲しいわけではなく、玉ねぎがしみてるようです。 皮を剥いて、切ろうとすると玉ねぎがツルンと滑ってこちらに飛んでき

ます。奥さんは気にすることもなく次の玉ねぎに取りかかります。
「なんて無駄なことしてるんだ。」
奥さんの後ろでは鍋がグラグラと煮えたぎっています。たまに成功した野菜はぽ〜んと鍋に放り込まれるのですが、そのたびにバシャーンと水しぶきを上げて火が消えそうになります。
「すごいな。あのカレーは食えたもんじゃなさそうだ。」
そう呟いたとたん、男の言葉を思い出しました。
「ちょいと奥さん、その鍋の中でグラグラしてんのはレトルトカレーじゃないのかい？」
反応がありません。まったく聞こえてないようです。
「おくさ〜ん！」
「無駄だよ。」
足元から声がしました。 声の主は猫です。オレンジ色の毛をした珍しい猫でした。
「カレーを作り出したら完成するまでは何を言っても聞こえないよ。」
「完成っていってもレトルトだろう？」
「まあそうなんだけどね。」
「あの煮込んだ野菜はどうするんだ？」
答えは返ってきません。下を見ると、もう猫はいませんでした。
「まだ出来ないのかな〜。舞踏会に間に合わなくなっちゃうな〜。」
後ろからのんきな声が聞こえました。振り向くとさっきの男です。赤ん坊がいません。
「どうしたんだい赤ん坊は？」
「ベンチが壊れちゃったんで。」
「それと赤ん坊と、どんな関係があるんだい？」
「ベンチに寝かしておいたら急に大人になっちゃたんで、重さに耐えられなくなって壊れたらしい。」
「何だそれは。からかってんのかい？」
そう言って笑いながら外へ出ると、でっぷりした男が潰された元ベンチの上にまだ座っていました。
「何だって、おめー、こんなに急に大きくなるんだよ！」
「さあ？」
目を丸くしてつっこんだ源助に対しても、気のない返事です。そしてまたポケットからタバコを出して口にくわえました。
「だから子どもが一緒の時にタバコは…」
「もう子どもじゃないけど。」
「…」
男はタバコに火をつけると、その場にしゃがみこんで、ゆっくりと煙を吐き出しました。
「あ、そうだ。」
男は何かを思い出したようです。
「さっきちょっとタバコの煙をふーってかけてやったんだ。大人の味を知っちまったんだな…」
そう言って小さくクスリと笑うとまた大きくタバコを吸い込みました。
「そんなことでいきなり大人にならないだろう！その前に子どもにそんなことするんじゃないよ、まったく。」
源助はイライラしてきました。こういうときは何か家具作りに集中して気を落ち着けたいものです。ふと家の横を見ると木材が置かれています。
「あの木材はなんだい？」
「ベビーベッドを作ろうと思ってたんだけど、大人用に変更だな。て言うか、自分で作らせるか。」
男はあい変わらずタバコをくゆらせています。
「俺が作ってもいいかい？」
「そりゃ助かる。カレーができるまでによろしく。」
無茶なことを言ってくるものです。でも源助はまったく意に介していません。逆に嬉しそうです。 背中の辺りをゴソゴソやると、布袋を取り出しました。いつも肌身離さず持っている『家具作り七つ道具』です。 源助は赤ん坊だった男の

寸法を手際よく測ると、早速木材を切り出しました。 みるみるうちにベッドが出来上がっていきます。 気づくと周りに人だかりができていました。動物達も集まって、興味津々見入っています。
「おい、みんな！このじいさんすごいぞ！」
さっきの父親が呼びかけて人を集めています。 その中には、始めに崖で出会ったネズミの『ボク』もいて、「あっアリスだ！」と言って顔見知りだということを自慢していました。
「アリスってあの女の子か？」
という例の下りが始まりましたが、今回はネズミが解説してくれたので源助はラクでした。
「それ、なんだ？」
ワニが指差しました。
「ノコギリだよ。木を切るんだ」
源助がその辺にあった丸太を切って見せると、「おぉ～っ」と歓声が上がりました。
「それは？」
今度は小さな女の子です。
「これは金槌だ。木と木を組み合わせるときに使うんだよ。俺は使わないんだが、普通は釘を打つときに使う道具だよ。」
次々と道具に関する質問がきます。
「お前さんたちはどうやって作るんだい？」
源助は不思議になって訊き返しました。
「俺たちはこうするだけだよ。」
熊が指をパチンと鳴らすと、置いてあった木材が動きだし、瞬く間にベンチが出来上がりました。 驚いたのは源助の方です。
「なんだい！魔法が使えるのか？」
「マホウってなんだ？」
「不思議な力のことだよ。」
「それならあんたの方だ。俺たちは昔からこうしてるんだ。そんな風に道具を使ってなんてできないよ。あんたすごいなぁ。」
それから源助は、集まった動物達から『魔法使いのアリス』と呼ばれるようになりました。 ベッドが出来上がると、みんな「おもしろかった」「すごかったね」と話ながら三々五々去っていきました。 呼び込みをしていた父親は、徴集した見物代を数えながらほくそえんでいます。
ベッドもよい出来映えで、気分のよくなった源助は、熊が作ったベンチに腰かけてキセルを吹かし始めました。
「なかなかいい腕だね。あんた程の職人には会ったことないよ。」
見ると横にはさっきの猫が座っています。
「君はこの道具を見ても驚かないんだなぁ。」
「ワシはあちこち放浪してるからな。今はこの家でやっかいになってるが、そろそろまた旅に出ようかと思っている。」
「そうか。ところで、伯爵夫人の舞踏会とやらに行ってみたいんだが、どうやって行ったらいいんだい？」
「招待されてるのかい？」
「いや。ただみんな行くみたいだから興味があってね。」
猫はしばらく顔を擦っていました。
「あまりお勧めじゃないけど、どうしても行ってみたいんならあそこの帽子屋を右に曲がってまっすぐ歩いて行きな。」
「おう、ありがとよ。」
源助はキセルをしまい、早速言われた帽子屋の方に歩き出しました。
大人になった元赤ん坊は、出来たてのベッドでぐーすか寝ています。 家の中では、やっとカレーが出来たらしく、旦那を呼ぶ奥さんの声がします。 それを横目に、猫もその家を後にしました。

ティータイム

猫に教わった帽子屋まで来ると、店は閉まっていて『ティータイムにつき、裏庭へどうぞ』というメモが貼ってありました。 なるほど裏庭から声が聞こえます。源助は行ってみることにしました。 大きなテーブルにたくさんのティーセットが用意されていますが、座っているのは帽子屋の女主人と学ランを着た若い男、そして２人の間で眠っている亀でした。

「ノドがかわいたな。一杯いただけないかね。」

「どうぞ好きな席にお座りなさい。」

源助は彼女の向かい側に座りました。

「いまお茶を届けさせるわね。コロ助起きなさい！」

寝ていた亀を起こすと、ティーポットを甲羅の上に乗せて源助の元へ向かわせました。

「あんた達は舞踏会に行かないのかい？」

「あたしは行く予定だけど、この子はここの住人じゃないからねぇ。」

帽子屋はティーカップを持ったまま男の子に視線を向けて言いました。

「へ～、お兄さん学生さんみたいだけど旅行かい？」

(こんな所に)って言いそうになったけど、我慢しました。

「学生じゃぁありませんよ。」

男の子は笑って答えました。

「この子、落語が好きだって言うから話させてるんだけどさ、ちっとも面白くなくて。」

「え～ひどいな～。」

男の子は口を尖らせています。

「じゃあこの人に小噺でも聴かせてあげなよ。」

「いいんですか？え～、ではご挨拶代わりに。」

男の子は嬉しそうに言うと、ゴホンとひとつ咳払いをしてひとり二役で小噺を始めました。

『ふたりの男が話しているところに、一匹のネズミがあらわれました。』

「おいこんなところにネズミがいるぞ。」

「ホントだ。このネズミでけえなぁ。」

「ええ？小せえよ。」

「何言ってんだい。でけえよ。」

「小せえよ！」

「でけえよ！」

「小せえよ！」

「でけえよ！」

「小せえよ！」

「でけえよ！」

間でネズミが「チュウ(中)」

「どうだい？」

帽子屋が源助に聞きました。

「うーん、もうひとつかなぁ。」

男の子は少し考えて、 「じゃあ、これはどうでしょうか？落語の『じゅげむ』の一節から…。」

「おまえさん！今日は御七夜だよ。」
「なんだい、その御七夜てのは。」
「やだねーおまえさん、赤ん坊が産まれて7日目のことを御七夜って言うんだよ。」
「な～んだ初七日のことかぁ。」

「どうだい？」
また帽子屋が源助に聞きました。
「内容は面白いと思うんだけど…まだまだ話し方だな。」
「だってさ。」
帽子屋は男の子のティーカップにお茶を注ぎました。
「はぁ、まだまだか。これじゃ師匠にも笑ってもらえないな。」
男の子は軽くため息をついてお茶をひと口飲みました。
「師匠ってことは、落語家について修行してんのかい？」
「いえ？何でそうなるんですか？」
きょとんとした顔で答えられて、戸惑ったのは源助の方です。
「そらおめぇ、落語が好きで師匠になんちゃら言ってたら普通そう思うだろう。」
「僕がついてるのは占いの師匠ですよ。落語は趣味です。時々、師匠に聞いてもらうんですけど、まだ一度も笑ってくれたことがなくて、『まだまだ高座は無理だな』って言われるんですよ。」
「まるで落語の師匠のセリフだな。」
源助はあきれてしまいました。
「北海道には師匠の修行に付き人とした来たんですけど、はぐれちゃいまして。」
「ふーん、弟子を取るくらいだから有名なのかい？その師匠ってのは。」
「はい、そりゃもう。テレビや雑誌でも大人気なキワコさんですよ！」
占い師の弟子は自慢気に言いました。
「…。」
「さっきからそう言ってるんだけどさ、あんた知ってる？」
帽子屋が源助に訊きました。
「いや…、あまり占いには興味ないからな～。」
占い師の弟子はガッカリしたようです。
「キワコさんの占いは100発100中！わからないことなんてないんですよ！はあ～、まだ北海道では知られてないんだな…。いや、ここで僕がキワコさんのことを広めて必ずや全国区にしてみせます！見ててください！」
「まあ、頑張って。」
空に拳を突き上げ、勝手に誓いをたてている占い師の弟子に、帽子屋は素っ気なく言うと隣の席に移りました。
「どうしたんだい？」
源助は不思議に思って訊きました。
「そろそろ綺麗なティーカップが使いたくてさ。洗うの面倒だから新しいのを使うのさ。」
「その為にこんなにカップを用意したのかい？」
「そうだよ。合理的だろ。」
「はぁ、まあ…」
あきれてものも言えないとはこのことです。
「ところであんた。」
源助は、まだ空を仰ぎ見たままの占い師の弟子に声をかけました。

「名前は何て言うんだい？」
「はい、RB-CO36…じゃないや、阿部耕三郎と言います。」
「始めのRBってのは何なんだい？」
「あ、聞こえちゃいました？」
阿部耕三郎は片目をつむって舌を出すと、かわいこぶって誤魔化そうとしましたが、そんなものが通用する源助ではありません。
「いいから、その変なアルファベットは何なんだよ。」
「はい、実は僕、アンドロイドなんです。」
「はぁ～？」
「そういうのはいいから、さっさと説明しなよ。」
源助も帽子屋もとりあおうとしません。
「ま、信じられないのも無理ありませんけど…」
阿部耕三郎は髪をかきあげ、遠い目をして言いました。カッコつけてるつもりのようですが、他の２人はまったくの無視でヒソヒソと話しています。
「アンドロイドって、もっと賢そうなイメージだけどな。」
「そうね、作った人がダメなんじゃない？」
源助はアンドロイドの方に向き直るとまた尋ねました。
「あんたを作ったのは有名な科学者なのかい？」
「世に名前は出ていませんが、知る人ぞ知る科学者です。ドクター真鍋といいます。」
「知らんな～。」
アンドロイドはまたちょっと悲しい顔になりました。
「ですから、不世出の天才科学者なんですよ。」と自分に言い聞かせるように言いました。
「で、そのRBってのは？」
しびれを切らして、帽子屋が訊きました。
「ロットナンバーです。『阿部耕三郎』は人間の世界で生活するための偽名です。ちなみに、RBというのは、Dr.のRとManabeのBからとったものだそうです。」
「珍しいところから取るもんだな。普通は頭文字だろうに…。」 と源助。
「DMだとダイレクトメールみたいだし、それにライバルのドクターマギーが使っているので嫌だったみたいです。」
「ネーミングってそんなものなのね。」
帽子屋はいつの間にか、さらに隣の席に移動していました。
「内緒の話なんですけど、僕の兄のひとりは、いまお城で働いてるんですよ！スゴいでしょ！」
「ところで俺のお茶はまだなのかい？」
アンドロイドの話に飽きてきた源助は話題を変えました。亀のコロ助はやっとテーブルの真ん中へさしかかったところでした。
「もう少しお待ちになって。」
と言いながら帽子屋はさらに隣の席へと移りました。
「それで師匠とはどこではぐれたんだい？」
源助はお茶を待つ間、仕方ないのでアンドロイドで時間を潰すことにしました。
「ススキノでの修行終わりに、突然師匠が…」
「ススキノで修行って意味わかんないんだけど。」
帽子屋が突っ込みましたがアンドロイドは無視して話続けます。
「ススキノでの修行終わりに、突然師匠がネコカフェに行きたいって言い出しまして。」
「なんだいネコカフェってのは？」
「ネコカフェも知らないんですか？ホントに困った人たちだなぁ。室内に猫を放し飼いにして、猫とふれあう時間を提供する喫茶店のことです。今、流行ってんですよ。」
アンドロイドが説明してくれました。

「最近はそんな店があんのかい？世の中変わったねぇ。」
「何だか癒されるみたいですよ。人間てよくわからないですね。」
「それでそのネコカフェに行ったのかい？」
源助が尋ねました。
「はい。で、うちの師匠もそこで猫の姿になってしまいまして…」
「またすげえことをサラッと言いやがるな。何だっていきなり猫になるんだよ！」
「すみません、説明が足りなくて。うちの師匠は猫の姿になる特技がありまして。」
「それは特技って言うのかい？」
「はい。狭い所にも入れるし、親切な人がエサをくれたりするから便利だそうです。」
「変わった師匠だな～。」
「それでネコカフェに行ったら師匠も猫になって一緒に遊び始めたんですよ。」
アンドロイドは仕切り直しのためにもう一度繰り返しました。
「それで？」
「しばらくしたら気の合うオスネコがいたらしく、いつの間にかふたり…あ、いや二匹でアフターに出てしまったようでいなくなっちゃったんですよ。」
「アフターってホストクラブみたいだなぁ。」
「それで探してるうちに森に迷い込んで、到る現在な感じです。」
アンドロイドは、椅子に座ると一口お茶をすすりました。
「そりゃ困ったもんだなぁ。ただ闇雲に探してもしょうがないだろう。でも見かけたら報せてやるから、何か特徴なんかはないのかい？」
「そうですね～。毛の色はオレンジで…、そうそう大ファンの『電気醤油』のギタリストからもらった、ギターのピックを首輪に付けてるんですけどね。」
「電気醤油って聞いたことあるけど何だっけ？辛口醤油か？」
電気っていうくらいだからビリビリくるほど辛いのかと思ってね。辛いもの好きの奥さんに買ってみようかと源助は考えました。
「またですか？もう！いま大人気のロックバンドですよ！ホントに何も知らない人たちだなぁ。」
アンドロイドの阿部耕三郎は、電気醤油を知らない人がいるなんてと呆れていました。
「なんだ本物の醤油じゃないのか。俺はジャズが好きなんだよ。そういえば思い出した、こないだ弟子どもがライヴが何とか騒いでたな。まあいいや、ギターのピックを首輪に付けたオレンジ色の猫なんてそうそういないだろ。」
源助はやっと届いたティーポットからお茶をカップに移しました。
「あれ？そういえば。」
「どうしたんですか？」
「さっきの家で会った猫はオレンジ色の毛だったなぁ。首輪はよく見えなかったけど。お師匠さんは結構年配かい？」
「いえ。でもそんなに年じゃないんですけど自分のことを『ワシ』って言ってます。」
確かにあの猫は「ワシ」って言ってたな。
「たぶん俺に道案内してくれた猫だ。また旅に出るって言ってたぞ。」
「え～っ！また置いて行かれちゃう！ごちそうさまでした～！」
アンドロイドの阿部耕三郎は慌ててリュックサックを掴むと、舞踏会場の方へと走り出しました。
「おい、そっちじゃないよ。こっちこっち。頑張って探せよ～。」
椅子にドカッと座り直すと、ポットからお茶を足しました。
「大丈夫かなぁ。」
他人事ながら気になりました。
「まったく落ち着きがなくて困るよ。」
「本当だ。あいつの師匠は大変だろうな。」
「そうかい、わかってくれるかい？」
「こっちも弟子を取ってる身だからな。」

源助はお茶を口に運びながら、帽子屋の方を見ましたが、女主人は角砂糖を積み上げてお城を作るのに夢中になっています。 亀のコロ助は目の前でぐっすり眠っています。 視界の端にオレンジ色の物体が見えました。
ぺちゃぺちゃぺちゃ…
なんと源助の横で、あのオレンジ色の猫が冷めたお茶を飲んでいます。
　「あれ？あんたさっきの…。ていうか、あいつの師匠の占い師じゃないのかい！」
源助は驚きました。
　「そうだよ。できの悪い弟子の下手な落語に付き合ってもらっちゃって悪いねぇ。噺の内容だけに頼って、まだまだ客を惹き付ける話術ってのがわかってない。」
そう言うと、またぺちゃぺちゃとお茶を飲んでいます。
　「あんた本当に落語の師匠じゃないのかい？」
　「ワシが落語するように見えるのかい？」
　「猫が落語をするようには見えないが、占い師にも見えないな。」
　「人を見た目で判断しないでよ。」
猫の占い師は顔をゴシゴシと洗いながら言いました。
　「猫だろ。それより何でいつまでも猫の姿してるんだ？」
　「だって、かわいいでしょ？」
そう言うと、猫の占い師は地面へと降りて大きく伸びをしました。
　「さて、そろそろ行こうかな。明日は歌舞伎町で修行なんでね。」
　「歌舞伎町で何の修行するのかは知らないが、あの弟子はほっといていいのか？」
　「スケジュールくらい憶えてるさ。」
猫の占い師はそう言うと、スウッと消えてしまいました。

　「うおっ！あの猫、本当にただの占い師か？魔法使いみたいだ。」
そう言って、さっきは自分が魔法使いと呼ばれていたのを思い出すと、改めてまったくなんてへんてこなとこなんだと思いました。
　「それじゃ俺もそろそろ行こうかな。ご馳走になったね。」
振り向くと、帽子屋は角砂糖で作ったお城にお茶を注いで溶かしているところでした。
　「構わないさね。舞踏会で会いましょう。」
源助は舞踏会場への道を再び歩き出しました。
しばらく歩きましたが何もありません。ただ、どんどん道は細くなっていきます。最後は森の中の獣道のようになってしまいました。
　「まったくこれはどうしたってんだい？道はこれしかなかったはずだけどな。」
いったん戻ろうかと思ったとき、向こうの木の根元に小さなドアがあるのに気づきました。 もうこんなことは慣れっこになってしまったので、とりあえず入ってみることにしました。そこは井戸のような暗い穴の中でしたが、浅かったのですぐに這い出ることができました。
　「あれ、ここは。」
最初の崖に囲まれた草原でした。源助が出てきたのは、水が溢れ出たあの井戸です。
　「またここに戻ってきてしまったのか。」
まん中辺りには、やはりまたちゃぶ台があります。近づいてみると、鍵とメモが置いてあります。

『招待状　どうぞいらっしゃ〜い💖』

　「なんだこのハートマークは…。まあいい、行ってみるか。」
源助はその鍵を持って、例のドアの前までやってきました。今度は、ドアは源助が入れるほどの大きさのままで、向こう

のお花畑へと入っていくことができました。

串焼き

お花畑に見えたのは大きな建物の壁画でした。
　「うまくできた壁画だな～。まるで本物の花畑みたいだ。」
あまりに見事なので、源助は見いってしまいました。すると実際、風が吹くと花はそよそよと揺れて、雲も流れていくのがわかりました。
　「何だこの壁画！ホントに花が揺れてるぞ！」
思わず壁画に触れてみましたが、やはり壁です。
　「ど～ですか、私の力作は。」
突然後ろから大きな声がしました。振り向くと、筋肉隆々のモヒカン男が立っています。どう見てもガテン系です。
　「この建物を造ったのはあんたかい？」
源助が尋ねました。
　「いえ、ここはタロウ組という大手ゼネコンの仕事です。ワタクシは見ての通りの画家でして、この日本舞踏館にふさわしい壁画を伯爵夫人から依頼されたのです。どうです、私の作品の中でも一番の出来ですよ。あまりに感激して、サインを入れるときはブルッちゃいました。」
男は嬉しそうに言いました。
　「じゃあ、この『サトリチャリブル』ってあんたなのかい？」
源助が壁画の隅にあるサインを指差すと、男は満面の笑顔でコクコクと頷きました。
　「へ～、すごいな。こんな絵を描ける画家は見たことないよ。」
　「ありがとうございます！そう言っていただけると励みになります！」
サトリチャリブルは本当に嬉しそうに、頭を深々と下げました。
　「いまどき珍しい若者だな。」
うちの弟子達にも見習わせたいものだと、源助は感心しました。
　「ところで、日本舞踏館…紛らわしい名前だな…舞踏館ていうことは、今日の舞踏会はここでやるのかい？」
　「はい、もちろんです。そのために造ったのですから。」
　「今日の舞踏会のために？それはすごい！」
驚いた源助ですが、ちょっと気になったので訊いてみました。
　「もしかして、こういうのを建てるときは指を鳴らしたりなんてするのかい？」
　「え？なんですって？」
サトリチャリブルはキョトンとした顔です。
　「あ～、いやいやバカな質問して悪かった。」
源助は慌ててごまかしました。
　「そうですよ、変わったこと訊くお人だなぁ。他にどうやって建てるんですか～。ハハハハハハッ！」
　「やっぱりそうなんだ…ハハハ…。」
気を取り直して尋ねました。
　「ところで、わざわざ専用の会場まで作るなんて、そんなに重要なイベントなのか？」
　「実は伯爵夫人が、舞踏グループ『クイーンズ』を招待したんですよ。」
サトリチャリブルは自分のことのように自慢気に言いました。
　「クイーンズ？なんだいそりゃ。」
　「え、知らないんですか？本当に珍しいお人だなぁ。世界的な舞踏派アーティストですよ。ハート、ダイヤ、クラブ、スペードという４人グループなんです。」
　「なんだそりゃ、トランプみたいだな。」
途端にサトリチャリブルは慌てだしました。
　「あ～ダメダメダメダメ！トランプなんて言っちゃダメですよ！彼女たちはそう言われるのが一番嫌いなのですから。あ、もうこんな時間だ！そろそろクイーンズが到着しますから行きますね。」
急いで日本舞踏館の正面玄関へと向かいました。

「あぁ、俺も行くよ。」
源助も彼に続きました。

玄関前にはたくさんの人だかり。ちょうどクイーンズが到着したところのようです。 源助は人のすき間からなんとかクイーンズを見ることができました。縦長の平たい体の四隅に手足が生えています。 (やっぱりトランプじゃないか)と思いましたが、口には出しませんでした。 大歓声の中、クイーンズが会場に入るとすぐに、次は観客の入場が始まりました。
「ところで貴方はチケットをお持ちなのですか？」
サトリチャリブルは、隣にいる源助に訊きました。
「チケット？そんなものはないけど…あ、これならあるぞ。」
源助は招待状を取り出して見せました。
「これはハートさんからの招待状じゃないですか！」
「そうなのか？」
「だってハートマークがついてるじゃないですか！メンバーが毎回一枚だけ特別なお客様にお贈りするって、私もネットでしか見たことないんですよ。貴方はどういう方なのですか？」
「俺はただの家具職人だよ。」
「家具職人？家具作るのに職人なんて必要…あ！もしかして噂に聞いた『魔法使いのアリス』さんて貴方ですか？」
「あ、うーん…まあ。」
そう呼ばれているのは事実なので、とりあえず返事をしておきました。
「お噂を聞いて、一度お会いしてみたかったのですよ。みなさ～ん！あの魔法使いのアリスさんがここにいらっしゃいますよ～っ！」
サトリチャリブルは、源助の手を取って無理やり握手すると、周りの人々に大声で言いました。
「あ、いやぁ、俺は…。」
困っている源助の周りにみんな集まってきます。
「魔法使いのアリスって、魔法の道具を使ってベッドを作ったっていう？」
「ベッドは確かに作ったけど、あれはただの家具作りの道具で…」
「なんでも東京都庁や最近では東京スカイツリーも貴方がひとりで建てたとか。」
「そのデマはどこから出てきたんだ？」
「若い頃は江戸城も手掛けたって聞いたぞ。」
「俺は何歳なんだよ！それに大工じゃないんだ、家具職人なんだよ！」
誰も源助の声など聞く耳を持たず、勝手に話が膨らんでいきます。
「すごいなー。サグラダファミリアもずっとひとりで作ってるんだって？」
「…。」
もう反論する気力もありません。グッタリとしていると、突然大きな声が響き渡りました。
「どうしたというのです！」
時間になっても誰も会場に入ってこないので、伯爵夫人が様子を見に来たのでした。
「クイーンズの皆様が待っているのよ！私に恥をかかせるのはだれ？」
手に持った杖で手当たり次第に「お前か！お前か！」と小突いて回っています。 20人程も打ってまわると伯爵夫人も息切れがして座り込んでしまいました。
「ゼー、ゼー、ゼー、ングッ。…みんな…踊ればいいのに。」
伯爵夫人がそう言うと、打たれた人たちが皆、パーッと弾けて薔薇の花びらになってしまいました。花びらは風に舞って、まるで踊っているようです。 みんなその様子を見ていて、青ざめてしまいました。
「あの伯爵夫人てのは相当ヤバイな。」
残された人たちが続々と入場するのに紛れて源助も日本舞踏館に入っていきました。

会場内は真っ暗でした。しばらくして目が慣れてくると、時代劇で見るような古い町並みが見えてきました。空には星も見え、建物の中というよりも、扉を隔てて江戸時代の夜にタイムスリップしたような感覚でした。
　「それにしても誰もいないじゃないか。」
源助は周囲を見回しました。あんなに大勢の人たちが入ってきたはずなのに、人っ子ひとり猫一匹見当たりません。
突然、大きな音と共に辺りが明るくなりました。花火が連続して上がったのです。そして和太鼓の音が続きます。源助はとりあえずその方向へ行ってみることにしました。
　「なんだこりゃ、盆踊りか？」
たどり着いた広場の中央には紅白の横断幕で飾られた櫓(やぐら)が建っています。その周りでは、スローテンポな曲に合わせて皆それぞれ踊っています。

夜はこれからさ エンドレス グッド ミュージック
月の光 まどわされ 異次元旅行

愛してる やっぱりうそ かけひき合戦 一年中
好きだとか 分からないとか 聞きたくないよ 1・2・3・4

今夜はみんなハッピー ロックンロールパーティ
恋のゲームもトリッキー オールナイトのパーティ♪

今夜はみんなハッピー ロックンロールパーティ
恋のゲームもトリッキー オールナイトのパーティ♪
yeah! yeah! yeah! huu!

その曲が終わると、次は三味線と和太鼓の音が響き、クイーンズが登場しました。大歓声の中始まったのはタップダンスでした。
　「あっ、アリスも来たんだ！」
振り向くとネズミのボクでした。
　「おう、また会ったな。」
源助は知った顔に会って、少しホッとしました。
　「ひとりなのか？」
　「ううん、友達と。あっ来た。友達のカレだよ。」
ボクが紹介しました。
　「また変な名前が出てきたな。フルネームは何ていうんだ？」
　「またぁ？面倒くさいな～。カレンドゥラ・パムステアンサリー・亀五郎だよ。」
　「略すなら亀五郎でよさそうなもんだがな…。まあいいや。ところで何持ってんだい？」
ボクもカレも何か串焼きのようなものを持っています。ボクが嬉しそうに見せてくれたのは
　「うぇ、キノコ？」
マッシュルームが三個刺さっています。
　「いま人気なのは苺マヨネーズ味だよ。」

ボクがまた涎を我慢しながら言いました。
　「え～、やっぱ照り焼きアンコだよ！」
カレが反論します。
　「あれは甘すぎだよ～。」
ボクも退きません。 もともとキノコ嫌いの源助にはどちらでもいい話ではありましたが、マヨネーズやアンコのベッタリついたマッシュルームは、さらに見るに耐えないものでした。
　「お腹すいちゃったよ。早速いただきま～す！パクッ！」
カレはそう言うと一気に食べてしまいました。
　「う～ん、とろけるぅ。」
　「ホントか？ホントに旨いと思ってるか？」
源助にはその幸せそうな顔が信じられません。
　「ホントだよ～。アリスも食べて…みたら…いい～の…に…」
カレの体が溶け始めました。
　「な、なんだ？おいボク、カレがカレが、おぉ～っ！」
そう言ってる間に、カレは完全に溶けてしまって、地面に水溜まりのようになってしまいました。 源助の頭の中は大混乱です。
　「おっおい、こいつ…ちょっと、ええぇぇぇ？」
カレの水溜まりを指差しながらボクの方を何度も振り返り訴えかけましたが、言葉になりません。
　「だって『とろける～』って言ってたじゃない。」
ボクはいたって平静です。
　「いいのか？そんなスルーの仕方でいいのか？」
　「おいらも食べちゃお～！」
ボクも「あ～ん」と大きく口を開けると、一口で食べてしまいました。
　「うま～い！」
源助は、固唾を飲んで見守っていましたが、崖の野原でのことを思い出しました。
　「あ、まさか！」
ボクは苺マヨネーズ味のマッシュルームを飲み込むと、満足そうに笑っています。特に変化はないようです。 源助はホッとしました。 ダンスの方も盛り上がっているようで歓声が上がりました。源助も舞台の方に目を向けていると、後ろから「にっ…」という声が聞こえました。 はっと振り向いた源助の目の前に、大きく口を開けたボクの顔がありました。

　「くっしゅ～ん！！！」

源助は吹き飛ばされてしまいました。それと同時にまたまた大地震です。
　「くっしゅん！にっくしゅん！」
会場は大変な騒ぎです。 鳥達はバッと飛び立ちましたが、突然のことだったので互いにぶつかってしまい落ちてきました。 熊は揺れるたびにゴロンッゴロンッと左右に転がります。 ポンタは、一緒に来ていたルートビッヒにしがみついてブルブル震えています。 クイーンズ達はといえば、大型トランプでピラミッドを作っていたところを倒されて、カンカンに怒っています。

オレンジジュース

しばらくして、揺れは収まりました。ボクはまた眠ってしまったようです。
　「ひで一目にあったな…」
大型トランプの下敷きになっていた源助は、なんとか這い出すとため息をつきました。
　「くしゃみのことを早く思い出すべきだった。」
横でうめく声が聞こえます。他にも誰かトランプの下敷きになっているようです。

　「はあ、助かったよ。お若いの。」
助け出してみると、源助よりだいぶ年輩のおばあさんです。
　「ひどい目に会いましたね。」
　「まったくだ。あたしの人生はこんなことばかりだよ。」
おばあさんもため息をついて言いました。
　「そんなこと言って、何かあったんですか？」
源助は尋ねました。
　「聞いてくれるかい？」
おばあさんはそう言うと、またひとつため息をつきました。 しかしいっこうに話し出そうとはしません。何か言おうとするのですが、続かずにため息になってしまいます。10分くらい経ったでしょうか、さすがの源助もウズウズしていると、急におばあさんが口を開きました。
　「あんた、音楽は好きかい？」
　「あ？ああ…、好きだよ。」
急に訊かれたので源助は少し戸惑ってしまいました。
　「でもロックなんてダメだろう？」
　「そうだなぁ、ロックはちょっと。ジャズはよく聴くけどなぁ。」
櫓があった辺りでは、伯爵夫人がこの騒動の原因を突き止めようと、またボカスカ小突いて回っています。
　「そうだよねぇ。そう思ったよ。」
おばあさんはまたため息をつきました。
　「あなたはロックが好きなのですか？」
　「いや？あたしは美少女系のポップスが好きなんだよ。何でそんな話になるんだい？」
おばあさんは少し不機嫌そうに言いました。
　「この話の流れなら、普通はそう思うだろ。」
　「ロックが嫌いなら、こんな歌も知らないんだろうねぇ。」
おばあさんは傍らの風呂敷包みを開いて中からギターを取り出し、急に立ち上がると激しくかき鳴らしながら歌いだしました。

Baby Baby Baby Baby
Baby, I'm crazy for you darlin'
Baby Baby Baby Baby
Baby, I love you forever darlin'
Baby Baby Baby Baby
Baby, I look jast you darlin'
Baby Baby Baby Baby
Baby, I'm crazy for you darlin'

チョコレートの床がとけてきた
足はどんどんはまりだす
早くここからぬけだそうか
それともいっそもぐろうか♪

風呂場にあふれだすオレンジジュース
洪水のようにドア破る
早く屋根まで登ろうか
それとも舟でも造ろうか♪

Baby Baby Baby Baby
Baby, I'm crazy for you darlin'
Baby Baby Baby Baby
Baby, I love you forever darlin'
Baby Baby Baby Baby
Baby, I look jast you darlin'
Baby Baby Baby Baby
Baby, I'm crazy for you darlin'

窓からなだれこむガムボール
部屋がどんどんせまくなる
早くまどから逃げようか
それとも二人で埋まろうか♪

「かわった歌だなぁ。」
「だろう？」
おばあさんはそう言って再び源助の横に座ると、またひとつため息をつきました。
それからしばらく沈黙が続きました。最初に口を開いたのは源助です。
「いまもう一度歌詞を思い出していたんだが。」
「それで？」
おばあさんが源助の方を見ました。
「意外と面白い発想だな。チョコレートの床が溶けたり、オレンジジュースが溢れたり。しかもそれに潜ろうかなんて、俺には思いつかないよ。こうゆうことを考えつく人ってのは、どんな頭の構造してんだろうね。」
「そりゃバカにしてんのかい？」
おばあさんは怒ったようです。
「そんなことないよ！そごいなぁと言ってるんだ。気分を害したなら申し訳なかった。あなたの曲かい？」
「いや、いま初めて聴いたよ。」
源助はおばあさんの言っていることがよくわかりませんでした。
「これ、ギター型のiPodみたいだな。そこで拾ったんだが、警察に届けるか。」
「あんたのじゃないのか！」
おばあさんは曲に合わせて適当にギターを弾く真似をしていたようです。

「ところでパンダを見たことはあるかい？」
おばあさんはギター型iPodをまた風呂敷に包みながら尋ねました。
「そういえば随分前に、上野動物園に見に行ったな。」
源助はあまり動物園などには興味がないのですが、孫にどうしてもとせがまれて一度だけ行ったことがありました。
「あいつは獰猛なやつなんだよ。」
おばあさんが怖い顔で言いました。
「ああ、そう聞くけどね。ま、動物園なら檻に入ってるから心配ないだろ。」
「知ってるかい？曲に合わせて功夫（クンフー）をやるんだよ。」
おばあさんは手をシュシュッと動かして功夫の真似をしました。
「なんだいそりゃ？」
源助はまたもや何のことかわかりません。
「ゴーグルを付けててね、鋭い目を隠してるんだよ。」
「何の映画だい？」
「映画じゃないよ。パンダのことだよ。」
おばあさんの目が据わってきました。源助はだんだん面倒になってきました。

「ところでお若いの、見かけない顔だけど、どこから来なさった。」
いまさらかと思いましたが、話題を変えたかったのでちょうどよかった。
「俺は家具職人で源助ってもんだ。お城の隣で家具屋をやってる。」
「家具職人に家具屋か、都会には変わった職業があるもんだねぇ。少しあんたの話も聞かせておくれよ。」
「こっちも昨日からへんてこなことばかりでな。」
源助は、弟子の手伝いに北海道に来て、キノコを追ってきてからの話をしました。おばあさんは不思議な顔もせず聴いていましたが、キリギリスの『青い男』の曲のところまで話すと、「それはあんたが悪いよ。その子が自由に作った曲にケチをつけるなんて。」としかめっ面で言いました。
「そうだな、悪いことをした。」
「その子は、今日の舞踏会でも演奏してたはずだから、謝っといでよ。」
「そういえば舞踏会に行くって言ってたな。演奏してたのか。そうするよ。」
その時、鐘の鳴る音がしました。
「裁判が始まるようだね。遅れるといけないから、早く行きな。」
「裁判？」
「いいから、さっさと行きな。」
最後は蹴飛ばされるようにして追い払われてしまいました。

ケーキ

裁判所に着くと、伯爵夫人が起訴状の朗読をしているところでした。

　　ケーキがひとつあったとさ　伯爵が楽しみにしていたケーキだよ
　　芽が出て膨らんで　大きく大きく膨らんで
　　フォークでブスッと突き刺すと　中からイタチが飛び出たよ

どうやらイタチが、伯爵が楽しみにしていたケーキを食べてしまったということらしいです。
　「アリス〜、こっちこっち！」
傍聴席からボクが手招きしています。
　「なんだいこの裁判は？てっきり地震のことだと思ったよ。」
源助はちょっと意地悪に言いました。
　「地震のことはカタがついたみたいだよ。巨大隕石が落下して、本州が海に沈んだって。」
　「ええ！なんだそりゃ！たたた、大変だ！ハツは…ハツは…」
源助は妻のことが心配で動揺してしまいました。
　「画家の人が伯爵夫人に説明してたよ。津波の心配はないから安心していいって。それにしてもそんな地震あったんだね。寝てて気づかなかったよ。」
　「…。なんだ…デマか…。」
源助はホッとしました。 画家のサトリチャリブルが、嘘をついて伯爵夫人をなだめてくれたようです。
落ち着いたところで改めて会場を見回しました。 陪審員席には犬のタマの奥さんやカエルや亀のコロ助の姿がありました。裁判長の補佐をしているのはフクロウです。 そして裁判長の席に座っているのは、なんとさっきのおばあさんでした。
源助はビックリして、おばあさんを指差したまま口をアングリ開けて固まってしまいました。
　「こら！裁判長を指差すんじゃない！」
仕切り役のフクロウがぴしゃりと言いました。
被告人席にはイタチが鎖で捕えられてグッタリしています。 裁判長が木槌をバンバンと打ち付けると、ガヤガヤしていた傍聴人達もおとなしくなりました。それを確認すると裁判長が言いました。
　「判決を言い渡す！」
慌ててフクロウが割って入ります。
　「恐れながら裁判長。まだ審議を行っておりません。一応順序というものが。まいったな〜。」
最後の「まいったな〜」は小声で呟いていました。
フクロウがラッパを二度吹いて言いました。
　「ひとり目の証人をこれへ。」
最初の証人は、赤ん坊をだっこしてタバコをふかしていた男でした。手にはカレーライスを持っています。
　「すみません裁判長。呼び出しが来たときには食事中だったもので。」
　「夕飯はもっと早く食べときな。」
　「昼飯なんすよ。妻がカレー作るのに時間かかっちゃって。」
そう言うと、胸ポケットから取り出したスプーンでカレーライスをすくって口に入れました。
　「そんなことはどうでもいい。ところであなたの後ろにいるのは？」
男の後ろには、でっぷりした大男がカレーライスをガツガツと食べながら立っていました。
　「あ、うちの息子です。まだ2ヶ月なんですけどね。」
　「2ヶ月じゃ離乳食は早いよ。それにカレーは刺激が強いからまだやめときな。」

「さすが裁判長、いいこと言うね。妻に言っときます。」
今日はもう食べちゃったからいいですよねと言って、自分もまた一口カレーを食べました。
「辛いものが好きなのか？」
裁判長が質問しました。
「そうですね～、だいたい。ケーキとかはどっちかというと嫌いだからな～。」
「それならあなたには関係ない。帰ってよろしい。」
男は眠ってしまった息子を引き摺りながら退廷していきました。
「次の証人を呼んでおくれ。」
裁判長に促されて、フクロウがラッパをまた2回吹きました。 次の証人はキツネのポンタでした。ポンタは緊張でガクガク震えていて、使用人のルートビッヒに支えられながら入廷してきました。
「ケーキは好きかい？」
裁判長が尋ねました。
「は、はい。でででででも、ルートビッヒが作ってくれる甘さ控えめの…“キツネの誕生日ケーキ”だけです。」
ポンタは震えながらも頑張って答えました。
「ルートビッヒというのはあなたのことか？」
「いかにも。私がこの腰ぬけに仕えておりますルートビッヒでございます。」
裁判長に尋ねられて、ルートビッヒは堂々と答えました。
「その“キツネの誕生日ケーキ”はどうやって作るんだい？」
「ご説明致します。」
ルートビッヒは一歩前へ出ると、証人席に固定されているマイクを手に取り流暢にレシピの解説を始めました。
「まず油揚げを準備して下処理を行います。油揚げは横か斜めかに切り分けますが、 私は通常斜めに切ります。理由は、その方がかっこいいからです。次に油揚げを開きます。すりこ木でごろごろ転がしたり叩いたりする方法もありますが、私は手で開いてしまいます。 それをしっかり油抜きして味付けしていきます。調味料は秘密なので詳しくは言えませんが、出汁と醤油と砂糖がベースです。落とし蓋をして10分程度炊きますと、お揚げが煮汁をほとんどすってくれます。そのまま冷まして、軽く搾ります。そしてそこに酢めし詰めていきます。酢めしには椎茸やかんぴょうの煮物を刻んで混ぜたりする方法もありますが、私は炒りごまを混ぜるだけです。ここでポイントは、酢めしはギュウギュウに詰めないことと、さっき搾った煮汁を手に付けながら酢めしを握ることです。ガリなど添えるとより豪華になります。 」
ルートビッヒの解説が終わると裁判長が声を掛けました。
「要するに稲荷寿司のことだね。」
そう言われてルートビッヒは目を見開いて反論しました。
「これは失敬な！神聖な“稲荷寿司”と楽しみのための“キツネの誕生日ケーキ”を一緒にされては困ります！」
「どこが違うっていうんだい？」
「稲荷寿司の場合は酢めしに生クリームを混ぜて、油揚げと酢めしの間にイチゴのスライスを挟みます。」
「そうかい。確かに違うな。」
源助はそれを聞いて「ウゲッ」と思いましたが、自分が食べたのが稲荷寿司ではなくキツネの誕生日ケーキであったことがわかりました。
「ポンタの誕生日用だったのか。食べちゃって悪いことしたな。」
源助は申し訳なく思いました。
「本日は皆様に“キツネの誕生日ケーキ”をお持ち致しました。」
ルートビッヒが合図をすると、行儀よくお皿に盛られた稲荷寿司…ではなく“キツネの誕生日ケーキ”が運ばれてきました。
「稲荷寿司ではないのか？」
一人ひとりに取り分けられたケーキを前に、裁判長が尋ねました。
「稲荷寿司はキツネの一族にとって大切な伝統料理。材料となるイチゴの時季にしか作れませんので。」
「ではクリスマスというわけか？」
「いえ、イチゴの旬は初夏でございます。」

ルートビッヒは裁判長の目をしっかりと見据えて言いました。
　「これ、おいしいよ！アリスは食べないの？」
ボクが源助に訊いてきました。
　「ん？あ…ああ。いまは腹が一杯だから…。」
ポンタの家でのことを思い出して、手が出ません。
　「じゃ、いただいちゃうね〜。」
言うが早いか、源助の分も口に放り込んでしまいました。
　「あなた達は関係ないようだな。次の証人だよ。」
裁判長はもぐもぐしながらフクロウに言いました。 フクロウもケーキを頬張っていたので、慌ててリストをパラパラとめくりました。 ラッパを2回吹くと。
　「証人、魔法使いのアリス！」

「あ、はい！」
源助は突然呼ばれたのでビックリしました。 しかも『魔法使いのアリス』という呼び名に反応してしまったことにも自分で驚いていました。 証人席に立つと、裁判長がじっと見ています。
「魔法使いのアリスってのはあんたのことだったのかい。てっきり若い女の子だと思ったよ。」
「有栖山源助だ。魔法使いでもアリスという少女でもない。」
源助はここぞとばかりに、みんなの間違いを訂正しましたが、 「そんなことはどうでもいい。この件に関して知っていることはあるかい？」
裁判長には特に関心がなかったようです。
「あ〜、特に何も…。」
源助は拍子抜けしてしまいましたが、とりあえず質問に応えました。
「何も？」
「ええ、何も。」
「何もってことはないだろう。」
裁判長は引こうとしません。
「ではイタチの熊五郎に会ったこともないというのだな。」
「熊五郎って名前だったのか。いやぁ、一度だけ会ったことはあるが。」
イタチの名前が初めて明かされました。
「何も知らないとは嘘ではないか。虚偽の発言は罪が重いぞ！」
裁判長は、してやったりと笑みを浮かべました。 源助は困ってしまいました。そのとき、外でパタパタと走ってくる足音がしました。
「ごめんなさい、遅れちゃって。」
入ってきたのはイタチでした。
イタチ？？？
みんな目を丸くして、被告人席といま入ってきたイタチを見比べています。 熊五郎は全員に注目されて不思議でなりません。
「どうしたの？あっ！」
被告人席を見てやっと理由がわかりました。
「何で？何で？」
イタチの熊五郎は大慌てで周囲の人達に声を掛けましたが、誰にもわかりません。 被告人席のイタチは静かなままです。
「いま来た熊五郎、とりあえず前へ来なさい。」
フクロウに促され、源助がいる証人席まで出てきましたが、さっぱり何が何やらわかりません。
「被告人席の熊五郎を一番、いま来た熊五郎を二番とする。」
フクロウが、便宜上勝手に決めました。
「さて裁判長、いかがいたしましょうか？」
フクロウが尋ねました。
「どちらかが偽者なんだろう？いかがいたしましょうかも何もないよ。正体を現さなかったら２人とも処刑するだけさ。あんた達、10秒だけあげるよ。ひとぉつ…」
裁判長の言葉に二番の熊五郎は震え上がりました。まったく話が見えないうちに処刑されてしまいそうなのですから。裁判長は構わずカウントダウンを続けます。
「ふたぁつ…」
「あの、あの、いったい全体何だっていうんですか？」
二番の熊五郎はブルブル震えながらも裁判長に訴えました。
「みぃっつ…」

「わ、私はしがない身分でして、最近やっと好きなケーキも食べられるようになりまして…」
二番の熊五郎は証人席のマイクにしがみついて、震える声で言いました。
「ケーキ好きか、本性を現したな。よぉっつ…」
裁判長のカウントは続きます。
「わわわ、私はしがない身分でして…」
また同じことを繰り返しました。
「いつぅつ…」
「わわわわ、私はしがない身分でして、ポンタが言いますには…」
「ぼ、僕は何も言ってなんかないよ！」
ポンタもルートビッヒに抱きつきながら大声で言いました。
「ポ、ポンタが言いますには…、稲荷を見るとイライラして…」
ガチガチに緊張している熊五郎にポンタの声は届きません。
「裁判長、否定致します。」
ルートビッヒがポンタの代わりに発言しました。
「ポンタは否定しておるぞ。」
裁判長がピシャリと言いました。
「わわわわわわ、私はしがない身分でして、亀のコロ助が言いますには…」
二番の熊五郎はコロ助の方を見ましたが、コロ助は陪審員席でグッスリ眠っていて反論も何もありません。
「それで私はケーキなんて一言も…」
「すみません、コロ助は何とおっしゃったのかしら？」
陪審員のタマの奥さんが手を挙げて尋ねました。
「わわ、私はしがない身分でして…」
二番の熊五郎はまた同じことを繰り返しました。 そうしているうちに10カウント終わりそうです。 「むぅっつぅ…ななぁつ…やぁっつぅ…」
「あひゃぶびばぁ…私は私はしがない、しがない…」
二番の熊五郎の目はグルグル回っています。
「ここのっつ…」
もう誰も声を発する者はなく、裁判長の声だけが響きました。
「とぉぉぉ…」
「キャハハハ！」
裁判長の10カウント目にかぶさるように、大きな笑い声が響き渡りました。
「処刑になっちゃかなわないな〜。」
一番の熊五郎です。 皆が注目する中、後ろのチャックを下ろして出てきたのは、白ウサギでした。
「マコリンじゃないか！」
「おお、ほんとだ。」
「生で見たのは初めてだなぁ。」
裁判長とフクロウは一瞬にして険しい顔になりました。源助はまったく意味がわかりません。
「あいつ、何なんだ？」
傍聴席の最前列に座っていたサトリチャリブルに訊きました。
「マコリンといって、指名手配中の怪盗ですよ。そこら中に貼り紙してるのに気づかなかったのですか？本当にあなたは何も知らな…」
「あれっ！あいつは俺が追ってきたキノコをさらっていったウサギじゃないか！」
昨夜のことが甦ってきました。
「ほう、あなたが話していたウサギとは怪盗マコリンのことだったか。」
裁判長はフッと笑うと、廷吏に命じました。
「指名手配中の怪盗マコリンを引っ捕らえろ！」

ところが誰も動く者はおりません。それどころか、ポカンと裁判長の顔を見ています。
　「恐れながら、裁判長…」
フクロウが遠慮がちに話しかけました。
　「怪盗マコリンはその〜、すでに鎖で捕らわれております。」
　「…。」
イタチに変装した状態で始めから鎖で縛られていたのです。チャックを下ろして顔を出すことはできましたが、体は相変わらずイタチの着ぐるみのままで、鎖もしっかりと巻き付いています。 少しの間沈黙が流れたあと、裁判長はひとつ咳払いをしました。
　「評決願います。」
10名の陪審員がプレートを掲げました。

『イタチは無罪、ウサギは有罪』というプレートが6枚。
『イタチは有罪、ウサギは無罪』というプレートが2枚。
『イタチもウサギも有罪』が1枚。
無記入が1枚(これは亀のコロ助。まだ眠ったままでした)

この結果を見ながら、裁判長はフクロウとふたことみこと言葉を交わしました。一番近くにいた者の話では、打ち上げをどこでやるか話していたようです。
　「では判決を言い渡す！」
裁判長は厳かに宣言すると、イタチを無罪とし、ウサギの裁判は改めて開くことにすると発表しました。 同時に天井から吊るされていたくす玉が割られ、裁判所の屋上では鐘がカンカンと鳴り出しました。傍聴席にいた報道関係者は、我先に飛び出して行って携帯やメールで結果を報告しています。 しばらくすると、上空のヘリコプターからイタチの無罪を報せるアナウンスが流れ始めました。
　「なんだかすごいなぁ。」
あっけにとられていた源助が何気なく被告人席を見ると、ウサギの姿はありません。鎖で縛られているのは亀のコロ助です。
　「あれ？マコリンとかいう怪盗がいないぞ！」
誰もそのことに気づかなかったようで、廷吏達は急いで法廷を出ていきました。

　「よかったなあ、無罪が証明されて。」
イタチの熊五郎は嬉しさのあまり源助に抱きついていました。
　「よ、よかったあ。」
熊五郎の目には涙が浮かんでいました。
　「魔法使いのアリスさんのおかげです。是非ともお礼をさせてください。」
　「いいよ、お礼だなんて。俺は何もしてないんだし。」
　「後で食べようと思ってた俺の大好物があるんだ。こんなことしか出来ないけど、食べてやってちょーだいよ。」
熊五郎が取り出した紙袋から出てきたのは、ホカホカのマッシュルームでした。
　「えっ！あ、いや、あの〜キ、キノコはちょっとぉ。」
源助は冷や汗が出てきました。
　「今日の稼ぎは全部これに使っちまったからさ。それにアリスさん、これを探しにここまで来たんだろ？」
　「あ、まあ、確かに…そう…なん…だが…」
他の動物達も集まってきました。
　「食べてやってくれよアリスさん。熊五郎の一日分の稼ぎだ。」
　「あんたにとっちゃ『こんなもの』かもしれないが、こいつの気持ちも汲んでやってくれよ。」
　「いや、別に『こんなもの』なんて思ってやしないけどさ。」

嫌いなんて言えない状況です。
　「さあ、アリスさん。」
　「うっ！」
　「どうぞ、魔法使いさん。」
　「あ…あぁ…。」
　「はい、あ〜ん💖」
サトリチャリブルが、ひとつ摘んで源助の口に無理やり押し込みました。
　「うっ！うんぐぐぐぐぅ！ゴックン…」
マッシュルームを生まれて初めて飲み込んだ源助は、その場にヘタヘタと座り込んでしまいました。 するとどうでしょう。
　「あれ？」
体が少しずつ大きくなっていくのがわかりました。 と思ったら、ぐ〜〜〜んと伸びて伸びていきます。すぐに周りにいた動物達が点になり、裁判所も小さくなり、森が一目で見渡せるようになり雲の上まで伸びていきました。
　「うわ〜っ！何だ！助けてくれ〜っっっ！」

エピローグ

　「師匠！師匠！夕飯の支度ができました。起きてください。」
その声に源助は飛び起きました。冷や汗で身体中びっしょりです。
　「はあはあはあはあ…あ〜夢かぁ。」
　「だいぶうなされてましたよ。」
起こしにきた弟子が、蒸しタオルを手渡してくれました。
　「おおサンキュー。内容は忘れちまったが、変な夢だったな〜。」
　「夢ってそうですよね。」
弟子が笑いながら言いました。 顔を拭きながら時計を見ると、もう夜です。外も真っ暗になっています。
　「ありゃ、もうこんな時間か！10分くらい休憩のつもりだったのに、グッスリ寝ちまった。すまねぇな、あまり役に立てなくて。」
源助は体の汗を拭き終わると、傍らにおいてあったキセルを取り上げ、煙草の葉を詰め込んで火を点けました。
　「そんなことないですよ。師匠のお陰で作業が10倍くらい早く進んでます。大助かりですよ。」
　「そう言ってもらえると来た甲斐があったってもんだ。」
ベッド代わりにしていた長椅子から立ち上がり、ひとつ大きく伸びをすると、お腹が「ぐ〜っ」と鳴りました。
　「はははははっ。さて、夕飯は何を馳走してくれんだい。」
源助はお腹を擦りながら言いました。
　「実は米を買い忘れてしまいまして。キッチンを探したところパスタがたくさんありましたので、今日はそれにしました。」
　「そうか、忙しかったからな。米が食えねえと力が出ないが、お陰でお前さんのスパゲッティも久しぶりに食べられるってもんだ。お前さんがこっちに帰ってからは、作る奴がいなくてな。」
　「誰かに教えておけばよかったですかね。私は元コックですから逆に簡単でよかったですよ。」
キッチンではラジオが点いていて、音楽が流れていました。
　「なんだいこの騒がしいのは？」
源助は顔をしかめました。
　「今日は電気醤油特集なんですよ。師匠のところにいた頃は、みんなでよく聴いてたなぁ。いまはどうですか？」
　「ああ、例のロックバンドか。いまでもあいつらよく聴いてるよ。お前もあい変わらず好きだなぁ。俺には良さがまったく解らん。」
弟子は源助のためにラジオを消してくれました。
　「ではいただこうかね。おや？これは何だ？」
パスタに、まるっこいものがたくさん入っています。
　「近所の方がマッシュルームをくださったんですよ。」
途端に源助の眉間に皺が寄りました。
　「おめ〜、俺がキノコ嫌いなの忘れたのか？」
声もドスが効いています。弟子はさぞかし震え上がっているだろうと思いましたが、顔色ひとつ変えません。
　「忘れちゃいませんが、たくさんいただいてしまったもので。それに師匠、好き嫌いはよくないですよ。おかみさんからも、何でも食べさせるように言われてます。」
淡々と言うと、源助が投げ出したフォークをまた持たせて、自分は先に食べ始めてしまいました。
　「ババアめ、余計なことを…」
小声でブツブツ言いながら、源助もフォークを突き刺し食べ始めました。 きれいにマッシュルームだけ残していましたが、弟子の鋭い視線を感じて、仕方なく食べてみようとして、やはりフォークが止まります。
　「う〜ん」
マッシュルームを見つめながらコロコロ転がしています。
弟子はさっさと食べ終わって片づけに入ってますが、まだ源助は皿を見つめたままです。
　「師匠！」

弟子の声に驚いた源助は、皿をひっくり返しマッシュルームをすべて床に落としてしまいました。
　「あっ、しまった！これはもったいない。」
嫌いなものであっても、食べ物には違いない。粗末にはできないと、拾おうとしましたが見つからない。見回すと、コロコロと外に転げていくところでした。 源助もあわてて外に出ました。

　「あれ？師匠。どこ行っちゃったのかなぁ。師匠！し～しょ～！」
見るとさっきまで丹念によけていたマッシュルームが見あたりません。
　「師匠のことだから、いくら嫌いでも食べ物を捨てるなんてことはしないはずだけどな。食べて気持ち悪くなったのかな？」
トイレに行ってみました。
　「師匠～。」
外にも声をかけてみました。
　「あ、月が出てる。やっと晴れたな～。明日は作業しやすいぞ。」
家の中にはいないみたいだけど、源助のことだから心配ないだろうと思い、とりあえず食器洗いを済ませることにしました。
キッチンに戻ると、ラジオを点けました。ちょうど新しい曲が始まるところでした。電気醤油の曲の中でも、特にお気に入りの曲です。 歌詞を口ずさみながら、洗い物を片付けていきます。曲中に出てくる名前が源助に似ていることに気づいて、クスッと笑ってしまいました。
　「明日、師匠に聴かせてみよう。CD探さなきゃ。」
月に照らされた夜更けの森の中に、ラジオの音だけが流れていきました。

アリスが食べたら体が伸びた
マッシュルームを一口食べた

森の奥深く さまよい続けてく♪

ボクが食べたらくしゃみが止まらない
カレが食べたら体が溶けた

森の奥深くさまよい続けてく♪

電気醤説『mushroom』

http://p.booklog.jp/book/72877

著者：りぃだぁ（by電気醤油）
著者プロフィール：http://p.booklog.jp/users/makoto912/profile

感想はこちらのコメントへ
http://p.booklog.jp/book/72877

ブクログ本棚へ入れる
http://booklog.jp/item/3/72877

電子書籍プラットフォーム：ブクログのパブー（http://p.booklog.jp/）
運営会社：株式会社ブクログ